様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月３１日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５３０８３４
研究課題名（和文）　自らの教育実践を反省し、改善を志向する教師のためのセルフ・スーパービジョンの開発
研究課題名（英文）　The Development of Self-Supervision for Educators Who Reflect on Their Own Educational Practice and Seek to Improve It
研究代表者
木下　百合子（KINOSHITA YURIKO）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：１０１６９９１４

研究成果の概要（和文）：本研究は、教員が自律的に、自分がスーパーバイザーであると同時にスーパーバイジーとなって、授業を反省し、改善に向けて内的に対話し、改善策を考え、実行するのを支援するセルフ・スーパービジョンの開発を目的としている。教員が内的対話をシステム的に実行できるワークとワークシートを開発し、試行し、その有効性を確認した。その結果、反省的思考のスキル形成、行動の選択幅の拡大、自己決定と自己責任感の向上に有効であり、教員の自己肯定感も強まることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The objective of the present study is the further development of self-supervision as a task, which entails an educator simultaneously and autonomously occupying the roles of both supervisor and supervisee. This development effort is intended to help educators reflect on their classes, conduct an internal dialogue directed toward improving them, think up strategies for improvement, and then carry them out. I confirmed the effectiveness of the tasks and task sheets that I developed and tested that enable an educator to systematically carry out an internal dialogue. The results of that project show they were effective in forming the skills that underlie the ability to self-reflect, expanding the range of options when it comes to behavior, and improving the capacity for self-determination and the feeling of being responsible for oneself. The educator's sense of self-affirmation was also strengthened.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	１，０００，０００	３００，０００	１，３００、０００
２０１０年度	８００，０００	２４０，０００	１，０４０，０００
２０１１年度	９００，０００	２７０，０００	１，１７０，０００
年度			
年度			
総　計	２，７００，０００	８１０，０００	３，５１０，０００

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・４００１
キーワード：授業改善、教育スーパービジョン、セルフ・スーパービジョン、反省的思考、スーパービジョンコンピテンス、スーパービジョンワーク、ワークシート

１．研究開始当初の背景

（1）授業改善へのニーズ

現在の社会の教育ニーズの変化および子どもの発達変化に鑑みて、授業改善が喫緊の課題となっている。そして小・中学校の教員も、授業がわからない子どもがいることを知

っており、授業改善の必要性を自覚している。また現代の教育ニーズに適合するよう授業を変えていく取り組みにも意欲をもっていることが明らかになっている。しかし、教員が自分の授業を他人に観察してもらい、授業者が授業の意図や方法について十分に話し、授業者が納得して授業改善に取り組む契機となる研修の機会は少なく、ましてや授業改善まで同伴し、支援を受ける機会はほとんどない。

（2）研修のオールタナティブとしての教育スーパービジョンの必要性

日本では、教員が自由意志で授業改善に取り組み、授業改善まで同伴し、支援するための、授業改善を目的としたスーパービジョンが開発されていなかったので、平成 15・16 年度学研究費補助金（基盤研究（C）（2））「教師活動支援のためのコミュニケーショントレーニング―スーパービジョンの開発研究」（課題番号 15530586）をえて、教育スーパービジョン研究に着手した。本研究において、コミュニケーショントレーニングをスーパービジョンに編入することが、授業改善にとって有効であることが明らかになった。

（3）専門的に養成された教育スーパーバイザーの必要性

教育スーパービジョンを開発し、その有効性を確証した結果、専門的に養成された教育スーパーバイザーが必要であることが明らかになった。平成 18・19・20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「授業改善を目的とした専門的な教育スーパーバイザーを養成するためのプログラム開発」（課題番号 18530602）をえて、教育スーパーバイザー養成のためのプログラムを開発した。専門的に養成されたスーパーバイザーとなるための基礎資格として、教員養成に関与した経験、教職経験、スーパーバイジーとして教育スーパービジョンに参加した経験が必要であることが明らかになった。

（4）教員が一人でできる教育スーパービジョンへのニーズ

教育スーパービジョンは、専門的に養成されたスーパーバイザーとスーパーバイジーとしての教師によって構成される。上記研究における教育スーパービジョンの有効性の検証過程において、教育スーパービジョンに関心を持った教員から、「自分一人でスーパービジョンはできないものか」、「教育スーパービジョンをしたいがグループがみつからない、どうしたらいいか」という質問がでた。授業改善を望んでいるが多忙のために、あるいは教育スーパーバイザーやグループが見つからないために、教育スーパービジョンを実施できない教員のこのニーズに応える必要から、本研究に着手した。

したがって、本研究は、平成 15 年度から本格的に取り組み始めた、教育スーパービジョン開発研究の継続研究として位置づけられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、教員が自分自身でイニシアティブをとり、自分自身がスーパーバイザーであると同時にスーパーバイジーとなって、自分自身の教育実践を反省的に振り返り、授業を改善するための内的対話を行うセルフ・スーパービジョンを開発することである。

スーパービジョンは、スーパーバイザー（他者）の支援を得て、自ら授業を反省し、改善を考え、改善の検証にスーパーバイザーが同伴する点に特徴がある。この過程を教員一人で行うのがセルフ・スーパービジョンである。だから、教員が自分自身を客観視し、無意識の行動を意識化し、授業を一人で反省的に考え、改善するのを支援するための方法、ならびにこの方法によるワークプログラムとワークシートの開発が必要となる。

３．研究の方法

（1）教育スーパービジョンおよびセルフ・スーパービジョンに関する文献研究を行い、モデルとなるセルフ・スーパービジョンを確定する。

（２）大阪府下の中学校教員を抽出し、アンケート調査を実施する。アンケートの目的は、教員が自分の教育活動を反省し、授業改善に着手するのを支援できるプログラムを開発する基礎資料とするためである。

（３）すでに開発している教育スーパービジョンモデルをセルフ・スーパービジョンのモデルとして変形を試みる。

（４）教員が自分自身の授業を反省的に考え改善策をつくりだすために必要な内的対を、システム的に実行できるプログラムを開発する。内的対話が堂々巡りするのを避け、生産的に考えていけるためには、内的対話をシステム化することが必要だからである。

（５）内的対話をシステム的に行うためのプログラムを実行するさいに役立つワークおよびワークシートを開発する。

４．研究成果

（1）セルフ・スーパービジョンの必要性

①大阪府下の中学校教員を対象に「教員研修のあり方」についてアンケートを実施した。アンケートの結果から、①教師の授業改善へのニーズは高い、②忙しくて研修に参加するための時間確保が難しい、③それぞれの教員の個人的ニーズに合った適切な研修は、それほど多くない、④教科担任制のため、授業に関する校内研修が難しい、ことがわかった。

このアンケート結果は、平成 19 年度に実施した、小学校教員を対象としたアンケート

結果と共通する部分が多いことがわかった。そして、小・中学校教員を対象としたセルフ・スーパービジョンへのニーズは高いと判断できた。

②セルフ・スーパービジョンが対象とする教員

セルフ・スーパービジョンは全ての教員を対象としているが、特に次の二つのグループに属する教員を視野に入れている。

第1のグループは、自分の教育活動や授業実践に満足していない、あるいは実際に授業で困難をかかえているために、授業改善を望んでいる教員である。

第2のグループは、自分の教育活動や授業実践の現状に相応の満足感をもつが、もっと違った授業をしたいとキャリア・アップを目指している教師である。

セルフ・スーパービジョンは、この二つのグループに属する教員を特に対象としている。

（2）教育スーパービジョンキールモデルのバリエーションとしてのセルフ・スーパービジョン

①教育スーパービジョンキールモデルのコンセプト

教育スーパービジョンキールモデルは、平成 18・19・20 年度の科学研究費補助金を得て明らかにした成果である。教育スーパービジョンキールモデルは、専門的に養成されたスーパーバイザーとスーパーバイジーとしての教員で構成される。スーパーバイザーは、スーパーバイジーが自由意志で自分の教育活動を反省し、改善案を考え、実行する過程に同伴して、いわば触媒の機能を果たす。

ワークは、①授業における教師活動のレベル、②教師の教育目標と教育意図のレベル、③教師の人格と生育暦が関与するレベル、の三つのレベルで構成される。そしてワークを効果的に実行するために、ワークシートが開発されている。それは、①のレベルに関するもの 29 種類、②のレベルに関するもの 13 種類、③のレベルに関するもの 16 種類である。この研究でキールモデルの優秀性が明らかになったので、本研究においても、キールモデルをベースにした。

②　教育スーパービジョンキールモデルのバリエーション

セルフ・スーパービジョンは、教員が一人で行えることに利点があると同時に、そこに限界もある。例えば、授業におけるコミュニケーション過程について言えば、教員が自分で授業をしながら、全ての生徒の反応を観察することは難しい。あるいはグループ学習をするときに、それぞれのグループ内で話し合われていることを全て聴き取ることはできない。だから授業におけるコミュニケーション過程は他人に観察してもらうほうが効果的である。そのように考えると、教育スーパービジョンの①のレベル、つまり授業における教師活動のレベルはやはり他人に観察してもらうほうがよいと言える。さらに、セルフ・スーパービジョンは、何よりも教師の内的側面を重視するので、内的対話を実行するためのスキル、反省的に考えるためのスキルの形成に重点をおくことが効果的である。

（3）セルフ・スーパービジョンワークの構成理念

教育スーパービジョンキールモデルのバリエーションとして開発されているセルフ・スーパービジョンワークの構成理念は、①現実を社会構成主義的に理解する、②人間を全体的・統一的に理解する、③フィードバックを重視する、④現実から出発して未来志向的に目標を設定する、⑤教師の行動の選択の可能性を拡大する、⑥その時点での最上の行動を選択する、⑦自己肯定の立場を強化する、の7点である。

人間は現実それ自体に反応するのではなく、自分が内的に構成している現実の模写に反応する。つまり人間は、それぞれの個人のこれまでの経験や文化や立場や利害などによって、一定のフィルターをかけた状態で現実を知覚する。教員もまた、これまでの生徒や授業についての多様な精神的・身体的経験を通して獲得された見方や考え方に裏打ちされている。この内的蓄積がどれほど個人に意識化されているかは不明なので、まずこの内面化された世界を意識化することがワークの出発点となる。

多くの場合に失敗経験が教師に意識化されるが、経験を失敗としてのみ把握すると展望が開けないので、むしろそこから教訓をえる対象としてみてフィードバックすることが重要である。この現実を肯定的にとらえる考え方は目標定位にも関連する。つまり目標は、授業での失敗や問題の克服に向かうのではなく、実践してみたい授業に向けて目標を設定するほうが生産的である。そして手持ちのリソースを吟味し、行動選択の可能性を広げ、その時点での最上の行動を選択することを基本とする。そして自分で考えた結果として授業が改善されれば、自ずと自己肯定の立場が強化されると考えられている。

ワークの開発は、このように現実を肯定的に把握し、未来志向的に構成する理念に基づくのが効果的であると考えられる。

（4）セルフ・スーパービジョンのワークとワークシート

以上の考察ならびに構成理念に基づいて開発されたセルフ・スーパービジョンのワークは、何よりも教員が自分の内的側面にアプローチするのを支援するものであることが望まれる。

一般的に自分の教育活動や授業実践に満足している教員は、①勤務している学校の状態（労働環境）に満足し、②子どもとコンタクトがとれており（能力）③子どもの成長を信頼でき（確信）、④教職にやりがいを見出し（価値）、⑤自分はうまくやっている教員である（自己肯定の立場）、と自分を認めていることが多い。

反対に、自分の教育活動や授業実践に満足していない、ないし困難をかかえている教員は、上の①から④のどれかに不満あるいは不安があるといえるだろう。その結果として、自己肯定の立場が弱い場合が多い。

そこで、キールモデルのバリエーションとしてのセルフ・スーパービジョンでは、上記の教員の満足、不満足の要因である、①教員の価値と確信にかかわるレベル、②能力にかかわるレベル、③労働環境にかかわるレベル、の三つのレベルでの変化を目標としている。そしてそれぞれのレベルでワークを設定し、ワークを支援するために、25 種類のワークシートが開発されている。

このワークシートを使ってワークをすることによって、①教員が自分の実践を客観視し、無意識の行動を意識化するのを助け、②思考が堂々巡りするのを回避し、③一定の結論を導き出すのに有効である、ことが明らかになった。

（5）セルフ・スーパービジョンの実行段階

セルフ・スーパービジョンの実行は、大きく三つの段階に区分できる。

① 第 1 段階：セルフ・スーパービジョンを実施する準備段階―4 種類のワーク

セルフ・スーパービジョンは、教員自らが自由意志で発起し、自分で計画をたて、自分で目標を立てるところに特徴がある。だから教員は、セルフ・スーパービジョンを無理なく実施できるための場所と時間を確保し、計画書を作成し、個人的なテーマを選択し、それに関する情報を集めることが必要となる。

② 第 2 段階：設定したテーマと関連したワークの実施―21 種類のワーク

・第 1 段階で設定したテーマに関連して、目標を具体的にたて、生活と関連付けて目標を吟味する（2 種類のワーク）。
・目標に相応したワークのレベルを選択する
　価値と確信にかかわるレベル―5 種類のワーク
　能力の開発にかかわるレベル―11 種類のワーク
　労働環境にかかわるワーク―3 種類のワーク
・ワークのレベルを決定し、それぞれのレベルのワークを選択し、ワークプログラムを編成する
・ワークシートを使ってワークを実行する
・ワークで得た認識と成果を実際の授業で試し、観察し、記録する。

③ 第 3 段階：第 1 段階、第 2 段階の成果を評価し、さらに別の目標でセルフ・スーパービジョンを続けるかどうか決断する。セルフ・スーパービジョンが自分の問題解決に有効でないと判断すれば、やめることもまた自由意志である。

以上の 3 段階で、セルフ・スーパービジョンの 1 サイクルが相対的に終了する。そして、継続することが決断されたなら、また第 1 段階から出発して別のテーマで実行することとなる。

（6）ワーク例：ワーク 8「私の職業上の確信」

このワークは、セルフ・スーパービジョンの第 1 段階でたてたテーマから、第 2 段階でより具体化した目標が、教員の価値と確信にかかわるレベルであるときに実行される。ワークは、以下のワークシートに従って、実行される。

ワークシート例

課題　自分の職業上の確信を明るみに出す

手順

1．スーパービジョンを行う部屋で、緊張をほぐしてから、次の問いにあるがままに答えなさい。
・あなたが教師になった理由は何か
・教師としてのあなたの強さは何か
・教師としてあなたの弱さは何か
・あなたが授業をしているクラスについて、信頼していることは何か
・教師としての自分自身について信頼していることは何か
・人間の能力が変化していくこと、その変化の可能性について、信頼していることは何か。

2．この質問についてのあなたの答えの背景にはどのような確信が隠れているか、思いついた考えと連想をメモしなさい。

3．職業上の確信のリストを階層化しなさい。

4．ちょっと休憩してから、次の質問についてよく考えなさい。
・教師としての自分について、どのような確信を持つことに喜びを感じるか
・同僚や生徒たちの応答について、あなたはどのような応答が嬉しいか
・あなたが授業をしているクラスに関して、あなたはどのような立場に喜びを感じるか。

あなたの考えをメモしなさい。

指示

このワークを実行したら、あなたのリストをもう一度静かに吟味しなさい。追加・修正を吟味してから、このシートを脇におきなさい。ワーク 10 と 11 で、もう一度このリスト

に立ち返ります。

以上が価値と確信のレベルで準備されている５種類のワークの１例である。無条件的に考えるのではなく、ワークシートに従って、考えを進めていけば、無意識的に思っていたことが対象化されるところにワークシートの意義が認められる。その結果、思考が堂々巡りすることが避けられる。そしてこのワークの成果が、次の思考の材料となるところにシステム化されたワークの意義が認められる。

(7) 得られた成果の位置づけと今後の展望

教育スーパービジョンに関する継続研究の成果として、セルフ・スーパービジョンが一定の有効性をもつことがわかった。つまり全ての教員にとって必要な反省的思考のスキル形成、行動の選択幅の拡大、自己決定と自己責任感の向上に有効であり、その結果として自己肯定感を高めることができる。

そしてセルフ・スーパービジョンは、これを一人で実行するだけではなく、教育スーパービジョンにスーパーバイジーとして参加する経験をもつほうが、より効果的であることも指摘される。

研究最終年度に、教育スーパービジョンキールモデルの開発地ドイツを訪問することによって、ドイツでは学校に専門的に養成された教育スーパーバイザーが配置されていること、スーパーバイザーの多くは非営利団体に所属し、そこで専門的なトレーニングをつむと同時にスーパーバイザーとして教員の支援活動を行っている、という知見を得ることができた。

日本においても教育スーパーバイザーを専門的に養成し、教育スーパービジョンが多くの場所で実施され、研修のオールタナティブとして、教員がスーパーバイジーとして教育スーパービジョンに参加できる機会を増やすことが今後の課題となる。そしてそれと並行してセルフ・スーパービジョンを教員自らが実行できるようにしていける条件を作り出すことが、あわせて今後の課題となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 木下百合子　授業改善に向けたセルフ・スーパービジョンの開発　『大阪教育大学教科教育学論集』第９号、71－74 頁、2010 年、査読無
② 木下百合子　授業改善に向けたセルフ・スーパービジョンの目標と課題『大阪教育大学教科教育学論集』第 10 号、35－44 頁、2011 年、査読無
③ 木下百合子　授業改善に向けたセルフ・スーパービジョンワーク『大阪教育大学教科教育学論集』第 11 号、61－70 頁、2012 年、査読無

〔学会発表〕（計１件）

① 木下百合子　授業改善に向けたセルフ・スーパービジョンの目標と課題　日本教師教育学会 20 回研究大会、2010 年 9 月 26 日、日本大学文理学部

〔その他〕
ホームページ等
大阪教育大学リポジトリ
http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace

６．研究組織
(1)研究代表者
木下百合子（KINOSHITA YURIKO）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10169914

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：